

薬師寺食堂の調査 (平城第500次)

奈良文化財研究所では、9月下旬から薬師寺食堂^{じきどう}の発掘調査をおこなっています。食堂は、過去数回にわたり近畿大学や奈文研によって部分調査がされていますが、今回は、法相宗大本山薬師寺がすすめている食堂再建事業にともない、その全容を解明すべく、全面を発掘調査対象としました。調査面積は約1,300㎡です。

食堂といえば、現在はダイニングルームやレストランのことを指しますが、古代寺院においては僧侶が食事を摂るだけでなく、経を読む等修業の場でもありました。その際には僧侶が一堂に会するために、一定の人数が収容できる大きさの建物が必要です。薬師寺の堂宇^{どうう}のなかでは、大講堂がもっとも大きな建物ですが、食堂もそれに負けないくらいの規模がありました。

薬師寺食堂の正確な創建年代は不明ですが、金堂や講堂、東塔等と同じく奈良時代前半に建てられたとみられます。しかし、天禄4年(973)に北側に隣接する十字廊から出火した火災で焼失してしまいました。建物は寛弘2年(1005)に再建されましたが、その後、食堂にかんする文献史料は見当たらず、江戸時代前半までには廃絶したと思われま

す。発掘調査では、食堂の基壇を現地表面下30～80cmのところで検出しました。基壇の築成には、瓦を含む土で整地した後に、地盤を堅固にするために土と砂とを互層に積み上げてつき固めた、版築^{はんちく}という工法が用いられています。礎石はすべて抜き取られていましたが、礎石抜き穴を検出しました。興味深いことに、食堂の基壇本体の版築は比較的粗いものでしたが、そのかわりに礎石下部分のみをピンポイ

ントに掘り込んで、粘土と土と瓦を互層に入れ、丁寧な版築をおこなっていました。この工法は壺地業^{つぼじぎょう}と呼ばれ、薬師寺では中門でもみられます。そのいっぽうで、金堂や講堂では、基壇全面に丁寧な版築を施しており、建物によって違いがみられます。食堂造営の際には建物の重量がかかる礎石下のみを特に強化するという効率的な手法が選択されたことがわかります。また、基壇外装の一部である地覆石^{ふくいし}や階段の下部(いずれも凝灰岩製)を検出しました。階段は、基壇南面に中央と東西の3カ所に設けられていました。さらに基壇周辺では、石組の雨落溝と石敷を検出しました。これらは特に南面で残りが良く、一部後世に壊されているものの約40mにわたって確認することができました。

これらの成果により、薬師寺食堂は桁行11間、梁行4間の礎石建物で、基壇は、東西が約46.8m(158尺)、南北が21.6m(73尺)の規模であることが確定しました。また、壺地業内で出土した瓦や土器の年代から、遅くとも奈良時代前半には造営が始まっていたことや、食堂の廃絶後に、基壇を壊して土坑が掘られており、そこから出土した土器の年代から、14世紀初頭までには食堂が廃絶したこともわかりました。

これらの調査成果については1月26日におこなった現地説明会で報告し、寒い中、714名の方にお越しいただきました。また、お寺のご好意で発掘調査成果を報告する場として、東僧房をお借りしました。今回の発掘は、奈良時代における薬師寺食堂の具体的な様相が判明し、発掘調査事例の少ない古代寺院における食堂の様相を知るうえでも貴重な調査となりました。(都城発掘調査部 石田 由紀子)



調査区全景(北西から)



基壇南辺で検出した階段や石敷、雨落溝(東から)